

没理想論争の論理

橋 本 佳 代 子

明治二十四年、逍遙、鷗外のいわゆる「没理想論争」が、世の注目をあびた。当時数多くの文芸批評がなされ始め、いくつかの論争が繰り返された中にあつても、この論争は逍遙と鷗外が積極的に新知識を取り入れてのものであっただけに、その注目度は大きかったであらう。

それ故この論争に関する文献も、以来数多くあるが、本稿では、これらの諸説をふまえながら、しかし、これらの諸説とは異なつた視点からこの論争を取り上げ、鷗外の論を中心に大きく四つの時期に区分し、鷗外がどのように逍遙に反論しているかということに焦点をあわせて、この論争を追って行きたい。

一、第一期

鷗外は「逍遙子の新作十二番中既發四番合評、梅花詞集評及梓神子」の中で、まず逍遙の「小説三派」について詳細なるまとめを行

った。そしてそのあまりにも丁寧すぎる要約のあとで、性急とも思える程の断言を行う。

かかればわれはハルトマンが審美の標準を以て、画をあげつろひしことあれども、嘗て小説に及ばざりき。今やそを果すべき時は來ぬ。いで逍遙子が批評眼を覗くに、ハルトマンが變態をもてせばや。夫れ固有と云ひ、折衷と云ひ、人間と云ふ、その義皆ハルトマンが審美學の中に存ぜり。今多くその文を引かむもやうなし。

唯爰にハルトマンが哲學上の用語例によりて、右の三目を譯せば足りなむ。固有は類想なり。折衷は個想なり、人間

は小天地想なり。注3)

コスミスムス

カツツングスデエ

インジキアアルイデエ

この断言には、他の者の口をはさませる余地が全くなく、鷗外の決めた結果のみがあるだけである。何故逍遙の批評眼（ここでは三区分）をのぞくにハルトマンの眼鏡を持つてこなくてはならな

子」の中で、まず逍遙の「小説三派」について詳細なるまとめを行

かったのか。逍遙が分けた固有派、折衷派、人間派の区分をハルトマンの類想・個想・小天地想とどうやって同一のものと確定したのか。この点については、鷗外は言葉を濁してしまつて明解な解説は少しもなされてない。

従来このことについては多くの人々が、逍遙が直感的経験によつて区分した小説の三派に対して、鷗外がハルトマンの審美学を適用し論理的に引き上げにかつたとしている。しかし果して本当に引き上げたのであろうか。全く別のものへと変えてしまつたのではないだろうか。久松氏は、逍遙が価値の差はつけないとしながらも無意識に行つてしまつた価値批判を、鷗外が明らかにしようとして、性質から価値へと變つてしまつたとされた。しかし何故鷗外が性質から価値へと變えたのかについては、触れられていない。ここにこそ鷗外の無理を承知での態度があると思われる。逍遙は「小説三派」の最後ではつきりと、

此故に評者は「勝閑」と「桂姫」とをもて物語派の作とし、「此ぬし」と「教師三昧」とをもて人情派の作とし、下に其然たる所以を辯ぜん。敢て此四者の優劣を判ぜんとにはあらず、其質の相異なるる所以を分析せんとす。^{注4)}

と述べている。この逍遙の「優劣を判ぜんとにはあらず、其質の相異なるる(後略)」という断言を鷗外が全く無視してハルトマンの眼鏡をあてはめたのは、明らかに横暴と言える行為であらう。

鷗外はその後で、何故逍遙の三区分が全くもつてハルトマンの言う三区分と同一であるのかを、それぞれ数行をもつて解説しよう

は三区分」をのぞくにハルトマンの眼鏡を持つてこなくてはならな

している。

逍遙子のいはく。固有派にては、(中略)「ゼネラリティ」はあれども、「インデューアリティ」はなし。所謂固有派の死したる概念を具ふところ「ゼネラリティ」を存ずるところ、これこそハルトマンは類括の意を取りて類想と名づけたるなれ。

このように「ゼネラリティ」という逍遙が「小説三派」においてただ一度しか使わなかつた語を持ち出して、その一言が逍遙とハルトマンの共通であるとしたのである。逍遙の折衷派をハルトマンの個想派と結びつけるにいたつては、いよいよ語勢が強まり、

折衷派にいたりては、逍遙子括きたる觀念ありといひ、「インデューアリティ」ありといふ。是れハルトマンが個々の活物の意を取りて個想と名づけたるものにあらずしてふにぞや。と述べている。これでは何一つ解説がなされているとは言えない。

ただ頭ごなしの決めつけがあるだけである。

また鷗外の論文のはじめに逍遙の「小説三派」を短くまとめていることは先にも触れたが、その部分とこの逍遙とハルトマンの区分が同一であるとしている解説の部分は、内容的にみてほとんど重なるところがない。つまり鷗外は「小説三派」を都合のよいように途中で二つに切つて、その後半の「ゼネラリティ」という語が使用してある部分のみをピックアップしたと考えられる。

そしてもう一つ鷗外の態度として注目すべきところは、この逍遙の小説の三派をハルトマンの三区分とが同一であると断言しているこの段階では、ハルトマンの三区分が美の三階級であるということ

には少しも言及していない点である。この段階では、全くハルトマンの論については触れられていない。ただ類想・個想・小天地想の三つの言葉が唐突に並べてあるだけである。これでは何のことも理解する間もなく、決めつけられたものを黙って受けとるしか方はないようである。ここに、鷗外がハルトマンを絶対者としてかつぎ出して、くるための用意周到な手法を見ることが出来る。逍遙の三分を「小説の派を分たむとせしもの多しといへども、何人か能くそが右に出でむ。」と絶賛しておきながら、直後で有無を言わさずその考え方はハルトマンと同じであると言いつつしてしまう。そしておもむろにその後で、実はハルトマンの類想・個想・小天地想とは美の三階級であって、それは彼の審美学の基本となるべきものであるとハルトマン哲学を説き始める。これはハルトマン哲学へとこじつけるための最も効果的な方法ではないであろうか。ハルトマンの美の階級とはあくまでも階級であって、逍遙の「三派の優劣をいへるにあらず」と述べていることと明らかに対立する。それを無理してハルトマンの眼鏡をあてはめるのであるから、少々無理がくるのは当然であつたはずだ。それを鷗外は見事にすっかり、入れ代えてしまったのである。

このように華々しくハルトマンを登場させた鷗外は、次に、ハルトマンの美の階級づけと引用とを並べて唯一無二の存在であるかのような説明を加えている。そしてその後で逍遙にむかつて少しの反論も許さぬよう計算しつくされた言葉を述べるのである。

逍遙子とても、固有・折衷・人間の三目を立て、流派とせしは、

あながち尊卑を其間に置かざりしにはあらざるべし。

逍遙が「小説三派」の中で再度繰り返した発言を巧妙にすり代えてしまったのである。これでは逍遙の論をふまえた上でのハルトマン説の展開とは決して言えない。むしろ頭ごなしに逍遙の意見をバカにし、自分の好きなように新たな解釈を設し、手をつくして自分の意見（この場合はハルトマン）を優位に展開させたのだと言える。つまり鷗外はここで逍遙を適当におだて上げておいて、すっかり自分のペースに巻き込んでしまおうとしたのである。このように、常に逍遙より一段高い位置に立ち大きく構えて、論争を自分の意のままに操ろうとした鷗外の態度の現れ始めが、この部分である。

逍遙をうまくおだて上げた後、鷗外は今度は逍遙が全く書きもしなかった事について言及している。

されば逍遙子が類想・個想・小天地想といふ美の三級を藉りもて來て、文の文界の衆生のために（後略）

逍遙は決して「類想・個想・小天地想といふ美の三級」を説いたのではない。いかにも逍遙が、かくのごとく述べたように書かれてはあるが、彼は決してそのような言葉は使わなかった。このように、逍遙が固有・折衷・人間という語を用いたにもかかわらず、類想・個想・小天地想という語を使ったのうに見せかけることは、これから後も度々、鷗外は行っている。

この部分で鷗外は、ハルトマンの紹介↓逍遙のおだて上げ↓逍遙のハルトマン化というような方法を用いて、すっかり逍遙の意見をハルトマンの審美学の中に組み込んでしまったのである。それは

「小説三派」にハルトマンの哲学を当てはめて論理的に引き上げたというよりも、すっかりハルトマン哲学にすり代えてしまったと言った方が、よりの確である。

このような下準備をすっかり整え終った後、鵜外は逍遙攻撃に移る。それは逍遙の三派をハルトマンの三階級に置き代えてしまった後であるから、はるかに攻撃がた易かった。要するに、「逍遙はハルトマンと同一のことを述べようとしているにもかかわらず、ハルトマンと異なる点がある。それは全て逍遙側のミスではないか。」とつきさえすればよかったからである。

逍遙子は類想の固有派、個想の折衷派、小天地想の人間派の別を立て、さて獅子吼をなしていはいはく。批判非なりとする人あらむ乎。其人は事物の平等を見て、差別を見ざる人なり。世に絶對あるを知りて、相對あるを知らざる人なり。(中略)現に、類想、個想、小天地想の別だに知らずで、批評の業に従ふ輩は、か叱咤せられむも可なるべし。然れども彼三派に優劣なしと見よといはばいかに。

このように、はじめに「類想の固有派、個想の折衷派、小天地の人間派」と述べて、あたかも逍遙がハルトマンの学説をほとんど利用したかのように持っていき、最後で、「それにもかかわらず、ハルトマンの意見と食い違ふのはどういふことか。」と食いついていく。この攻撃法は明らかに正当とは言えない。これを皮切りとして鵜外は逍遙の不備な点をことごとく例を上げて並べたてていくのである。

ダアキン、ハックスレーが説、謬妄哲理に優りたるはダアキン、ハックスレーが説の中に世界の眞理あればなり。謬妄哲理の彼等が歸納説に及ばざるは、その謬妄なるためにこそ、苟くも一世紀の哲學統といはれむものは、ダアキン、ハックスレー、が説をも容れざるべからず。

この鵜外の反論は「小説三派」の哲學の名は尊しといへども其の説まことに高からずば、まことに深き科學に及ばざること遠し。ダアキン、ハックスレーの學説をもて謬妄なる獨斷哲理に劣れりといふは狂愚なり。

という部分に反論したものである。これは逍遙が鵜外につけてまゐるべき例を上げたので、このような結果になつたと思われる。ダウインのような名実共に有名な科學者の學説と、内容のいいつわりの多い哲學理論と、その内容の充実度において比較しようとした逍遙の方にミスがあつた。各々の説の内容が充実しているか否かで、「哲學」と「科學」を比較することはできない。鵜外は、逍遙の比較の甘さにつけ込んだのである。そして「(ハルトマンが「ダルキニスムス」の論を見よ。)」として、ハルトマンを頭上高くかざし、哲學はたとえダウインなどの科學者であつても、全く足下にさえ及ばないものであるとした。

また次に鵜外は、逍遙の梅と桜の例を取り上げて反論しているが、これは鵜外の曲解であらう。

然れども類想と個想との別はおそらく梅と櫻との別に殊あるべし。花に譬へていはず、類想家の作も個想家の作も、おなじ櫻

花なるべけれど、かなたは日蔭に咲きて、色香少く、こなたは「インスピラチオン」の朝日をうけて、匂ひ常ならぬ櫻花の如しとやいふべからむ。

これは逍遙の

間々第二派の眼をもて第一派を評し、若くは第三派の眼をもて

第一派を評し、徹頭徹尾取る所無しと扶殺する者あり。(中略)

梅も櫻も其花たるや一つなり。然れども花に種々の別あるは争ふ可らず。(中略) 古たる梅園に就きて其花の櫻ならざるを笑

ふ風流雄の名にも似ではしたなきかな。

という部分を受けたものである。ここで逍遙は、同じ花であっても、梅と桜が全く同一線上に並ぶことができないように、小説の三派の中でも比較は不可能であることを述べたかったのである。梅と桜という全く別の花を用いたところに、逍遙の実例の価値があった。しかしそのところを鵜外は、同じ桜の花を引き合いに出してしまつて、逍遙の意図を少しも振り返らうとはしていないのである。何故逍遙が梅と櫻とを持ち出しかについては、少しも考えてみようとはしていないのである。

このように鵜外は、逍遙の取り上げた実例ばかりを追つてケチをつけている節がある。そこには表面的なものを論じるばかりで、逍遙の論を真から理解しようという態度が見られないし、当然理解を示していない。ただハルトマンの学説を体当りでぶつけていこうという高飛車な態度が見られるのみである。

『小説三派』における逍遙を攻撃する最後のものとして、鵜外は

ついに全く逍遙の「優劣をいへるにあらず」という根本的考えを無視し、覆すに至つた。

逍遙子是我文界に小天地想の人間派なきを認めき。(我國はいまだギョオチ、シエクスピヤを出さず)。逍遙子是我舊作家を以て類想の固有派に屬せりとなし、我新作家を以て至ら至だざる個想の折衷派となしつ。われは此評の殻を噛啐きて、其肉の甘さと其核の苦さとを味ふ。人間派なきは大詩人なきなり。妙手なきなり。舊作家の固有派に屬するは、其凡手なるためなり。新作家の折衷派に屬するは、其小家數たることを免れるためなり。

人間派つまり鵜外という小天地想の区分に当てはまる人物が日本にいなかったのは、「大詩人」や「妙手」がいなかったためであると鵜外はいう。しかし逍遙はあくまでも「人間派」つまり「最狭き意義にていふドラマの結構」、「人の性情を因として事變を縁とするもの」という分類にあてはまる作家がいなかつたのである。それを大詩人などに置き替へてしまつたのでは、逍遙の意図とするところと全く違つてしまうことになる。しかも「大」とか「妙」の字の意味するものは、一般に言う「詩人」よりも、世間的評価の高い人、有名な人、その人の作品が普及している人などという価値感や、筆のたつ人、技術的にも内容的にも優れている人などという評価を伴う。そこには当然、レベルの高さ、優劣が存在する。ここで鵜外は、決定的に、しかしそれとは解らぬように逍遙の言をすっかり覆し、すり代へてしまつたのである。

このような鷗外の対処のし方は小説の三派のみにとどまらず、次の詩の二派の場にも、はんで押したように同じである。

逍遙子が叙情、世相の二派は、ハルトマンが審美學上より見る

ときは、叙情詩、叙事詩の二門に當れり。
このように逍遙が区分した詩の二派をハルトマンの区分と同じものであると決めつける前には、前回と同じように、一応逍遙の説の大要を示している。その後でハルトマンと、ゴットシャルの『審美學』や『詩学』などをどんどん引用して理想主義、實際主義の違い、引いては逍遙詩、叙情詩についてまで言及している。そしてやはり類想よりも個想を尊ぶハルトマンの説を導入し、逍遙の説をその中に組み込んでしまふのである。

ここに所謂理想詩をば、類想詩と解しても善かるべく、又（謡曲のある部分をも除かば）叙事詩と解しても善かるべし。

また最後には、鷗外自身がハルトマンの眞の理解者であり紹介者であるということを決定付けさせるべく、忍月を相手にして皮肉っている。

このような鷗外の態度には、逍遙の論を切りきざんで適当にバラし、自分にとって都合のよいものを、又は当りさわりの少ないものを選び出して反論するという態度を見ることが出来る。長い目でみれば、逍遙がこのような論文を書くに至ったいきさつや逍遙の論の本質を全く考えようとしなかったこのような鷗外の態度に、没理想論争の根本的食い違いの原因があった。

鷗外の論はここで一転して「批評の手段」について論じ始める。

小島政二郎氏が「森鷗外研究」の中で「――そこまでは無事だった。

が、一轉して、先生が「批評の手段」を論ずるに及んで、偶々理想没理想の論争を生ずるに至つたのである。」とされているように、この部分の微妙な言葉の言い回し、特に、言葉の選び方用い方が、後に半年以上も長々と論争を続けるきっかけとなつた。それは逍遙が批評とは帰納的、没理想的、科学的であるべきであつて標準や理想、嗜好に左右されてはいけない、演繹的であつてはならないといったことを中心として、鷗外が反論する部分である。しかし「志からみ草紙」の二頁以上にも渡る鷗外の論は、「標準」や「理想」という逍遙が用いた、単語や取り上げた例などを右や左からつつき回しているという様子を呈している。

然はあれど觀察し畢り、研究し畢りて判斷を下さんずる曉には、理想なかるべけむや。標準なかるべけんや。理想とは審美的觀念なり。標準とは審美學上に古今の美術をみて、歸納し得たる經驗則なり。

この文に始つて鷗外は、饒舌なる詭弁家のごとく逍遙の論をたたく。

蠅を昆蟲なりといひ、拙き小説家を固有派なりといふときは、其際におのづから褒貶存ず。是れ演繹的批評ならざらむやはいも虫を昆蟲である、一人の小説家を固有派であると判斷を下すときには、必然的に「褒貶」が存在すると鷗外は反論した。しかし彼はここで逍遙が用いた「褒貶」という語を、意味が前後でうまくつながらないにもかかわらず無理矢理に使用している。「褒貶」と

はいうまでもなく、ほめることけなすことであつて、いも虫を昆虫だと区別するときや一人の小説家を固有派であると区別するとき、ほめたりけなしたりは決して行わない。ただその対象となる事物の性質、特質を観察し、調査し、検討した上で各々の区分された種の中に振り分けるのみである。ほめたりけなしたりする価値づけは行わない。

また演繹とは、普遍的命題から特殊命題を引き出すこと、もしくは一般的に組み立てた理論によつて特殊な命題を説明することである。つまり逍遙は、一人の小説家を見ると世間一般に下されてゐるその人物の評によつてその人物を評価したり価値づけたりしてはならないとしたのである。世の噂に惑わされず自分自身で培つた目をもつてその人物を見よというのが、逍遙の考え方であつた。これに対して鵯外は、一人の小説家を固有派なりと言うことは、演繹的批評となると反論した。つまり、固有派、という一般的に組み立てた理論によつて一人の小説家を説明すると、鵯外は見たのである。しかしこれでは逍遙と全く着眼点が違つてしまい、反論をしている意味がなくなつてしまふ。このように論理的にみて節の通らないものや、少しも逍遙の論文の意味するところとかみ合わないものを振り回して、鵯外は反論したのである。

また逍遙が、動物学者が対象たるべき動物を見るごとく、理想を離れて評すべきだということに対しては、

動物をきはむる學者の心は、世の常の用をばげに問はざるべけれど、進化説を唱ふる人は、微蟲を解剖するときも、おのれが

懐ける説の旨に慊はむことを願はざるにあらず。唯科學の公心あるをもて、預期せしところに反せし事實をも、言はで止むるときことなからむのみ。

と反論している。植物学者が植物をみる。動物学者が動物をみる。逍遙はここでは、自然科学者としてどのように対象に携わっていくかというその実際の方法、手法を問題にしているのである。決して、学者たちの自分の学説に対する不安や希望、または彼等の利害關係などを問題にしたわけではない。ここで鵯外は、大きく逍遙の意図するところとすり代えたのである。これは鵯外が誤つて犯したミスというよりは、自身分つていたのではないだろうか。そして鵯外はこの部分を実例として用い、結果として批評たりとも「用の有無」を考へて批評しなければならぬとした。しかし逍遙は、益の有無を離れて科学的に批評をなさねばならぬとしたのであつて、益と、用とでは全く意味が異つてしまふ。鵯外は逍遙の意図するところを都合よくすり代えることによつて、自分の論をうまく運ぼうとしたのである。岡崎義恵氏はこの部分で

要するにこの前哨戦では、逍遙の藝術様式設定説を美學的に訂正して、價值的・品等的意義の重んずべきことを明かにし、逍遙の價値判断排斥説に對して、單なる自然科學的記述の如きものに留まるべきでないことを主張するのが、鵯外の爲さうとしたところである。鵯外は此處でなほ逍遙の説にかなり賛意を表し、聊かそれを訂正するといふ程度の穏やかな態度を持してゐるのであるが、これが「没理想」論に入るに及んで、激戦の形

「追遥」を採るに至ったのである。追遥は、昭和八年（昭和八年）本学54年度卒業生（昭和八年）と評された。しかし、追遥の芸術様式設定説を価値的意義を重んずるよう美学的に「訂正」したのではなく、追遥の芸術様式設定説を鵜外は、すっかり審美学の名を借りて芸術階級設定説に変えてしまったと考えるのである。また追遥の価値判断排斥説に対して、自然科学的記述の如きものに留まるべきでないと主張したということも、追遥の論を少しも踏まえず理解を示そうともしないで暴走した結果であろう。独自の論を導き出すために追遥の論を曲解し、それを足掛りとしてハルトマンを振り回したのだと言えよう。論文の「追遥」

注

1、引用文中の傍点、傍線は全て省略した。

2、鵜外、追遥の論文名の下に掲載された号数が記されているものがあつたが、全て省略した。

3、「追遥子の数作十二番中既發四番合評、梅花詞集評及梓神子」

『志からみ草紙』24号、明24・9

4、「小説三派」坪追遥『現代文学論大系』1、昭30・11 河出書房

土井文雄氏の「追遥」

「追遥」

榎木一良